

荒野をこえて

がん いっしょう
カナダ雁の一生

アドリーヌ・ジョーンズ作

町田日出子訳



児童図書館 文学の部屋

評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 第730697号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

荒野をこえて

昭和49年8月10日 発行

¥980

訳 者 町 田 日 出 子

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷
製本所 株式会社 小林 製本

発 行 所 株式会社 評 論 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 7294

(著者との了解により検印省略)

落丁・乱丁は本社にてお取り替え致します。

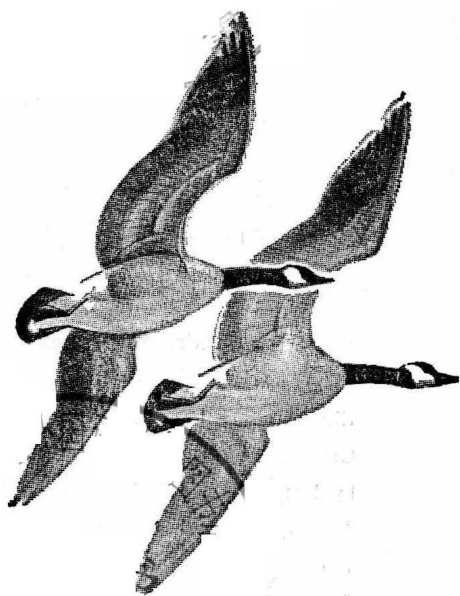
(A-2)

荒野をこえて

カナダ雁^{がん}の一生^{いっしょう}

A・ジョーンズ作 町田日出子訳

L・ダーリン 絵



Wild Voyager
Story of a Canada Goose

by

Adrienne Jones

Illustrated by Lois Darling

**Original English language edition published
by Little, Brown and Company**

©1966 by Adrienne Jones

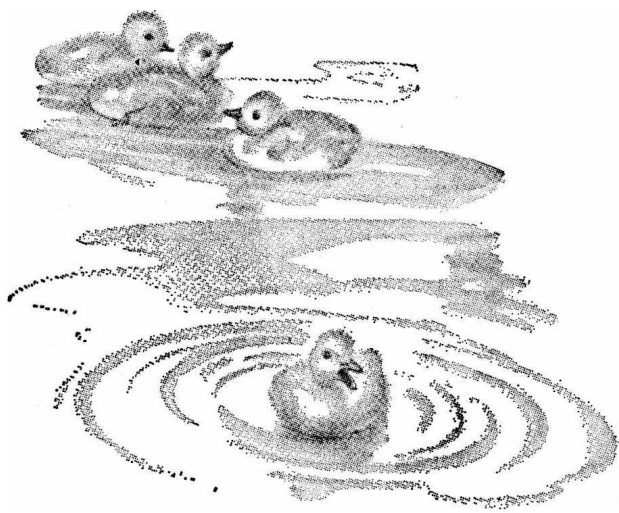
**Japanese translation rights arranged through
Charles E. Tuttle Co. Inc. Tokyo.**



10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
新しい生命	チェンの恋びと	一年目の夏	わな	ツレ湖	危険な空の旅	雁の群れ	釘づけ	くずり	はじまり
195	183	157	132	112	85	71	50	29	9

さし絵 L・ダーリング

もくじ





荒野をこえて

カナダ雁の一生

A・ジョーンズ作
町田日出子訳

1 はじまり

五月も末のある日、カナダ雁が、北極の冷たい青い空をわたってきた。マッケンジー河のデルタ地帯はるか上空に、鳴きながらVの字の黒いもようをつくって。

大きな編隊の先頭になって飛んできた雄の雁が、広く強いつばさをななめにして、旋回にいった。みんな彼にしたがつてまわった。妻である雌の雁は、すぐそばに寄りそって飛んでいた。この二羽は、カリフォルニア北部のツーレ湖から、カナダの北極海岸のボーフォート海の岸までの長い空の旅を、もう十回もともにしてきたのだった。

雄雁は、下の陸地を、その輝く目でちらっと見た。ことしはよい年だ。春のはじめから洪水が、マッケンジー・デルタのいくつにも分かれた水路を通じて、北海の冬の氷を陸から押し出してしまった。岸には黒い流れが一すじ残った。こうして氷を征服するにあたっては、南風の援助も大きかった。南風は、五月の太陽にきらきらと輝いている白いもすそに暖

かい息をふきかけ、冬の勢力を緯度七十五度の向こうに追いやった。ほんとうに、ことしの春は、すばらしい春だ。

こんな春ばかりではない。六月というのに、まだまっ白い雪と氷にとざされているときもある。北極からの風が陸地にふきあれるときもある。そんな年には、大きな雄雁も、雌の雁も、去年の夏の枯れ草をたべて、太陽がけわしい空の坂をやつとのぼってくるまで、なんとももちこたえなければならぬ。長い空の旅をしてきて、やせて、おなかもぺこぺこというのに、たべられるものといえ、やつと雪の下から掘り出した枯れ草しかないのだ。

ことは、ほんとうにいい春だ。いい春だけれども、雄雁にとっては、これが最後となるのである。雁はたいていは十二、三年生きられるし、運がよければ二十年というのも珍しくない。とすれば、彼はまだ年よりというほどではない。それなのに、ことは彼の最期なのである。だが、ともかくも、今は、死は、五月の輝く光景をふつとよぎる影にすぎない。それに、雁たちの下でまわっている景色は、じぶんから近づいてきてくれるみたいだ。

下へ下へとおりていきながら、雄雁は、くねくねと細長い首の先の黒い頭をまわして、そばを飛んでいる妻をふり返った。あごの下から頬にかけて、はけではいたような白いしまがきらりと光った。雁の中でもいちばん大きなカナダ雁だということが、それでわかる。雌の

雁の背中のきれいな灰色がかった茶色の羽毛、おなかの部分のやわらかい灰色の毛、つばさの先の力強くいっぱいに広げた風切りばね、それらがあざやかに空に描き出されていた。頭と首のすべすべした黒い部分にも、彼と同じような白いしまがあって、二羽は、とてもよく似ていた。そして、並んで飛んでいるうちに、なかまからはなれて、風をきって降りていった。

陸地は、もうすぐそこにあった。雪がまだらにとけて、茶色のしまが見えていた。よい春であった。長い旅が終わった、それだけだって、早くつがいたいと心せく雄雁にとっては、すばらしいことであった。

北の国では、つがい、巣をつくり、卵をだく、これだけのことを短い期間にやってしまわなければならない。新しく生まれたひなが、長い北極の夜がとぼりをおろす前に南へ飛んでいけるようになるためには、まだ冬將軍の去りきらぬふるさとへ飛んできて、苛酷な寒さと餓死の危険をおかすのだった。

降りていくにつれて、高い空から見る広い地平線は、どんどんしりごみして、やがて消えていった。デルタの、いくつもの流れが広く見えてきて、雪や岩や水が、はっきりしてきた。その瞬間、とつぜんまい降りて、つばさをばたばたとばたく。旅は終わった。つか

れたつばさをたたんで休めるのだ。

つがいおえると、雄雁おすかりと雌めすの雁は、デルタの低いじめじめとした島に巣すをつくった。この島はデルタのはずれにあった。まだ川の流れの弱いころには、氷が、島と大陸の浜はまべとの間の橋になっている。ここから、西の方へカーブしはじめて、その海岸線はデルタからずっとボーフォート海のはしまでつづいていた。陸地には、巣すづくりにいよいよなものがいっぱいあった。二羽ふたはねの雁はつれだって、枝えだや、"いぐさ"や"あし"や草などを運んできた。マッケンジー湾わんにそって、春の洪水こうすいが押し流おした、白くなった漂ひょう流りゅう木の枝を求めて飛ぶこともあった。とうぞくかもめにも、みつゆびかもめにも、海の氷の上で冷たい北極の陽光ようこうをうけてひなたぼっこしているあざらしの母子おやこにも、目もくれなかった。枝が集まると、巣の枠わく組みをした。

永遠えいえんに凍こてついたままの国で、ほんの少しの土を求めておいしげるヒースの低い茂しげみ、根の浅い茂みから、二羽の雁は、もっと小さい枝を集めた。そして、漂ひょう流りゅう木でつくった枠わく組みの中につっこんで、いちばん上をしっかりと固めた。細いヒースの茎くきを集めているときには、雷鳥らいちょうのことも、どさっとたたきつける雪のことも、すてきな冬のコートをぬいで、も

じやもじやの毛をした北極の狐がこつそりとうかがっていることも念頭になかった。

つぎには、やわらかい、“いぐさ”と“あし”をしめったデルタからもってきた。これをつめて、小枝でつくったごつごつの杵をふんわりとさせるのだ。雁たちは、いそしぎや、そりはししぎや、せわしげに川つぶちを往き来しているじゃこうねずみにはおかまいなしに、この柔らかな草をさがして、低く低く飛んだ。

さいごにじぶんのからだの綿毛で裏打ちをして、さあ、これで卵を生む用意はできあがつた。あんなに長い道のりを北へ飛んで来たのも、この北極海の浜べで、北極の夏の長い明るい空の下で、卵を生み、新しいひなをかえすためであった。

六月になった。雌の雁の準備もとのつた。まだとけきらぬ氷にかこまれた茶色の島で、“あし”のはえた、じめじめとしめった土の上にこんもりと巣がもりあがっていた。少しはなれた場所で、雄は、じっと卵が生まれるのを待っている。こうやって今までも春ごとに、九回も雌とともに待ったのだ。雁たちにとっては、今はまだ待つことのほんのはじまりであった。月の終わりまでは、ひなはかえらないからである。

雄もまた、雌が卵を生んで、ひなをかえすまで、なん週間もともに待っている。それがすめば必要なきには動くことができる。でも、それは歩くか泳ぐかで、ひなはもちろんまだ

飛べないし、親の方も、ひなのかえるころには羽のぬけかわるとやの時期がきてしまうから飛ぶことはできなくなる。大きな雁も、つばさを失っては、地面に釘づけである。だから、背中とつばさの灰色がかった茶色の羽毛や、尾と首の黒い羽毛、おなかの灰色の羽毛が新しくはえてくるまでは長い「待つ」期間なのだ。

だが、ことしの春は、死が雄を待ちかまえているのだから、雌は、この「待ち」あけをひとりで迎えなければならない。ひなたちと彼女だけで。

六月のある朝、太陽は前の日よりも暖かく、短い北極の夜のあとで、輝かしくのぼってきた。日の光はヒースの茂みにさしこみ、いくすじもの川の流れを銀色に光らせ、浮氷から、ずっとボーフォート海の上にきらめき、広い、荒涼とした風景を夜明けの長い影でいろどりながら。小さい茶色の島と陸地の間のせまい川口では、冬の氷がため息をついて、どろどろした水の中に沈んでいった。

いよいよ雌が卵を生む時がきた。彼女は巣の中の、やわらかいクッションの上にうずくまった。最初の卵が生まれた。大きくて、丸くて、灰色がかった白い卵だった。卵の中は暗くて、あたたかかった。母親のぬくもりがあった。そして、卵の中で、生命の影がこのぬくもりにこたえて成長していた。

二番目の卵が生まれた。そして三番目が。こうしてつぎつぎに七つの卵が母親の下に、丸くすべすべとして、あたたかく並んだ。七つの卵、だが最初の卵がいちばん大きかった。中では生命が、ずんずん成長しつづけていた。ただ一つだけは、生命の影がなかった。あとの卵は、ぜんぶ元気だった。母親は待つものにもはりあいが出てきて、ふわふわしたからだで卵をおおうと、長い首をのぼして巢のへりにのせた。

雌は巢からはなれたところに、ひとりで見張りをつづけていた。一度だけ雌のところにやってくる、草を彼女のそばに置いた。食欲はなかった。しばらくの間、二羽の雁は長い首をすり合わせていた。いつも、この時期は、二羽にとっていい時期であった。やがて雌は、また見張りにもどった。雌の雁は、ここからでも彼を見ることができた。頭をぐっと高くあげ、白いしまが六月の日光に誇らしげに輝いている。

たそがれがやってきて、やがて短い夜がはじまろうとしていた。いちばん大きな卵の中はあいかわらずあたたかく暗かったが、生命の影は、もうちっぽけな点ではなく、草の種ほどの大きさになり、さらに成長をつづけていた。

翌朝も、よく晴れていた。それにきのうよりもっと暖かかった。雌雁は、きょうは食欲が出てきた。雌は草や虫を運んできた。一度などは、何か小さなすっぱい赤い実をもって